教区御遠忌テーマ
今、いのちがあなたを生きている
流罪からの出発
-私はどこで生きているのか-

高田教区報

響流

第118号

発行所
上越市寺町2丁目24-4
真宗大谷派 高田教務所
編集　響流編集委員会
発行　杉本了恵
印刷　文化印刷㈱

新井別院（2010年1月18日撮影）

宗祖親鸞聖人との出遇い（方）が問われている

第十三組榮恩寺　宮本亮二

いよいよ宗祖親鸞聖人の御遠忌が近づいてきたのであるが、いよいよ世界が変わるぞというようなダイナミズム―迫力や躍動感というようなものが感じられない。せっかく真宗本廟の御影堂が再建当時以上に綺麗になったというのに。

しかし考えるまでもなく、それは建物がどれほど立派になったからといって実感される質のものではなかった。

有縁講のあの平井ショウさんは父親と一緒に両堂再建を見て「東本願寺の大建築はすごいですね。私たちも鼻が高いわ。」と言ったときに、篤信の父親から叱られたという。

「東本願寺がどんなに大きな建物であろうとも、お前が真実の教えを聞こうとしない限りは、ただの伽藍（がらん）だよ、伽藍堂（がらんどう）と言うものだ。お前にとってはかえって邪魔な物になってしまう。それならお前を連れて来るのではなかった。」（『赤倉ホテルのおばあちゃん』古海法雲）

三年前の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け「越後御流罪八百年法要」を通して、いったい何が私たちに明らかになったのだろうか。それとも何も明らかにならないまま法要だけが過ぎ去っていったのだろうか。越後流罪という厳しい法難を生きられた宗祖親鸞聖人の道を生きる―とはどういうことであるのか。

それは、「この身」「この世」の姿がどこまでも本願念仏の教えに照らし出され、そこにわれわれのさまざまな課題が明らかにされてくることではないだろうか。われわれ一人ひとりの本願念仏の教えとの出遇い（方）が問われ、われわれがつくり出している教団の在り方が問われ、われわれが生きる世界が問われているのではないだろうか。

そのダイナミズムがまだないのではないだろうか。

ひと ㊵

第六組得願寺住職
デイホーム木かげ
（有限会社和敬（わきょう）　会長）
秋山　祐成さん

高田駅からほど近く、大町通りにある得願寺には、デイホーム木かげがある。開所して七年目になるこの通所介護施設には、前住職　順成師の願いが込められていた。今回の「ひと」は、住職であり、この施設を立ち上げた秋山祐成さんにお話を伺った。

◆開設に至る経緯を教えてください

東京の大学を卒業して、七年間本山で宗務役員をしていました。高田に戻ってきて上越商工会議所にお世話になり、その時さまざまな業種の色々な方と知り合いになりました。そのおかげで、社会福祉法人・越後府中会の立ち上げに理事として関わることになったのです。その後、ケアハウス至徳路の初代施設長として実際の業務に携わって以来、何ヶ所かの上越地域の高齢者福祉施設にご縁をいただきました。

坊守（知恵子さん）も看護師で、私も関わった直江津の老健施設・国府の里の立ち上げスタッフでしたし、退職後は高齢者福祉に何らかの形で関わりたいな、と思っていましたので、境内地の店子（たなこ）さんが転居され空いていた寺域を利用してこの「木かげ」を設立しました。

しかし、業務として関わっていたからという理由以外に実は、父（得願寺前住職　秋山順成師）の影響もありました。父は常日頃「寺は子どもと老人が集まれる場所でなくてはならない。」と言っていました。

青少年教化では戦後、ボーイスカウトの高田第五団を立ち上げ、私自身も有無を言わさず一期生として、参加させられました。その私が今では、父の後を継ぎ団長をしているのですから、時の流れを感じますね。

当時は、お講であれ報恩講であれ、年寄りがお寺に参ることは当たり前でしたが、昨今はなかなか足を運んでいただけない時節になっています。「これからは、年寄りの保育園・保老園が必要だ。」と常々言っていた父の言葉もあり、だったら立ち寄っていただける場所をまず作ってしまおうと、この「木かげ」を開設しました。

◆開設にあたりご苦労されたことはありますか？

準備期間は一年でしたが、設立に関しての書類作り、役所との折衝は施設担当理事として働いていた関係上お手の物でしたので、特に苦労したということはありませんね。ただ、社会福祉法人か特定非営利法人か会社かということで少し思案しました。結局、有限会社で登記することにしました。ちなみに会社名の「和敬」は父の院号です。

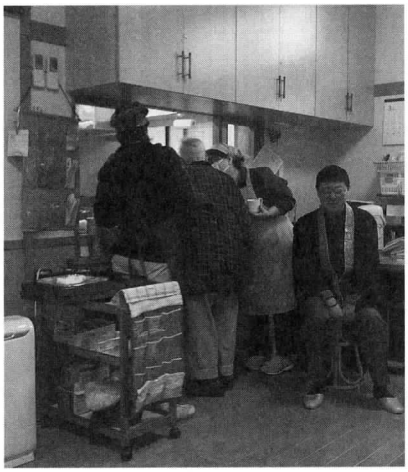
二〇〇二年の夏頃から職員の研修を始め、半年後の二〇〇三年三月に十名のスタッフで開所の運びとなりました。私が会長で坊守が施設長です。小さい所帯なので会長とは名ばかりの、何でも屋なのは現在でも同じです。親しいお友達の所に遊びに来たような気分で過ごしていただきたいので、木造建築にこだわって設計しました。また、入浴施設やトイレも「利用者の使いやすさ」を第一に製品を導入しました。

◆現在はどのような活動をされていますか？

当初十名ほどだった利用者はその日によって違いますが、二十名前後、職員も十五名になりました。基本的には、介護認定を受けられた方が、日中集まってゆっくりとくつろいで一日過ごしていただけるよう配慮しています。施設利用者は得願寺のご門徒に限らず色々な方々がいらしゃ

います。

利用時間は、午前九時三十分から午後四時まで、日曜・祝日はお休みです。季節ごとには春の花見、正善寺ダムのアジサイ見物、夏のソーメン流し等々、イベントを交えて楽しんでいただいています。また、近くに大町小学校があるので、定期的に生徒さんと交流しています。施設内にはお内仏は置いていませんが、春秋の彼岸には得願寺本堂でお参りをして、法話をしています。評判は上々ですよ。



◆思い出深いエピソード等ありましたら教えてください

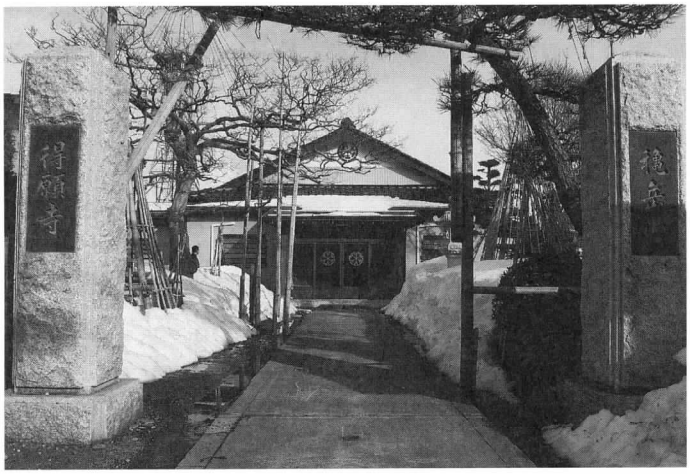
ある時、女性職員の為に施設内に臨時託児所を作ったというか、別室に幼児を預かりながら、仕事をして貰ったことがありました。その時施設を利用していた認知症のおばあさんが、その幼児の為にと、何年かぶりで針仕事をし、その子に涎掛(よだれ)けを作ってあげたことがありました。その時の明るく穏やかな表情と、生き生きとした動きは今でも忘れられません。人にとって、いくつになっても他者とつながって、何かをしてあげたいと思う気持ちが、生きるという事の原動力なのだなと感じた出来事でした。

◆これからについてお聞かせください

常々思っていることですが、「寺を開く」ということは難しい事だと思います。それぞれの立場で出来ることを心を込めてやることで見えてくることがあるのではないでしょうか。無理せず身の丈で、この先も堅実に続けていきたいと思っています。幸い若院も寺と、この「木かげ」を引き継ぐと言ってくれていますので、彼の思いでこの事業を続けてくれればいいと思っています。寺に生まれた者として、社会と常に繋っていることは本当に大事なことだと思っていますので…。

◆取材を終えて

駅には近いが閑静なロケーションの大町にある「木かげ」。本文には出てこないが、取材を終えた後、得願寺さまの沿革をお聞きし、法宝物を拝見させていただいた。もともと石山合戦にも助力したという由緒ある寺院で、江戸時代には高田藩主・榊原家の家中寺として、藩士の菩提寺であったそうだ。歴史ある寺院を護り、さらに社会に対して寺を開いている秋山さんの「その人にはその人の出来ることがあるのだから自然体でやれることをやりましょう。」という言葉にすべての事が集約されているように感じた。



データ

デイホーム木かげ

高田駅前通り直進、三つめの信号の大町通り右折すぐ（大町通りは一方通行なので車は大町小方面から）

上越市大町四丁目三番三十号

電話　〇二五―五二七―二三二六

※介護支援員（ケアマネージャー）と相談の上ご利用ください。

※要支援・要介護一～五の認定を受けた方ならご利用できます。

「高田教区の推進員養成講座」について

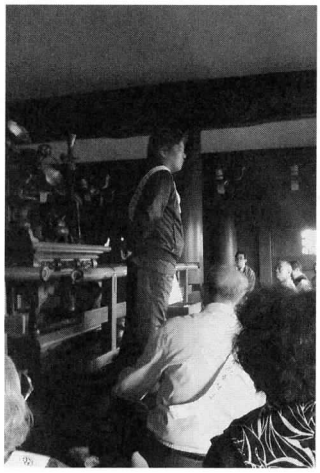
高田教区では各組において、教化施策の中心事業として、「推進員養成講座」（真宗講座）が開催されています。

全国の教区でも、推進員養成講座は開催されています。その「推進員養成講座」とは、一九六一年の宗祖七百回御遠忌の勤まった、翌一九六二年に「同朋会運動」が発足し、教化三本柱として《本廟奉仕・特別伝道・推進員教習》が進められ、一九八八年には現在の形の推進員養成講座が始められて「推進員」を半世紀に渡って生み出し続けています。まさに真宗同朋会運動の「いのち」といえる教化事業であるのです。

この事業は、全国のほとんどの教区においては「教区」の教化委員会によって「教区指定」として行われることがほとんどなのですが、高田教区では各「組」の教化委員会が中心となって独自に実施され続けている数少ない教区でもあります。

高田教区の現状について

二〇〇八年九月よりこの二〇一〇年六月までの二カ年でも、教区内の全ての組（十一カ組）が地元での前期教習を終えて、同朋会館での二泊三日の後期教習奉仕団に上山され、宗祖親鸞聖人の御真影の前で新たに「真宗同朋の会推進員」の誓いを建てられた方は二六〇人を超え、先んじて推進員になられた方も含めると高田教区の推進員は、名簿上では四二〇〇人を超えています。



教区における課題

ただ、高田教区では多くの推進員を生み出してはいますが、問題が無いわけではありません。一つには、教区・組に帰った後のフォロー、つまり「推進員」としての活躍の場が無いのでは、と耳にすることが多いのです。

たしかに本山での研修終了時に「真宗同朋の会推進員証」を受け取られ、地元に帰られても、まず「推進員」として何をすればいいのか分からないのが現状であると思います。

やはり講座に送り出した育成員・寺族が「推進員」になられた方々と共に歩みを進める方向を見定める為の語り合いが大切であると思います。そこから「同朋会運動」を共に推進していく「推進員」の使命が拓（ひら）かれて行くのではないでしょうか。

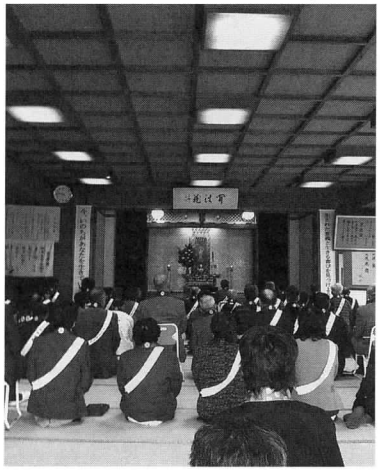
もう一つには、最初に高田教区は、「組」が中心になって「養成講座」（真宗講座）を継続して実施されていると前述しましたが、ともすれば、毎回同じ事の繰り返しであり、決まった事業を消化しているだけではないか？　との声も聞きます。確かに実際に受講者をお誘いしたり、運営を行われるスタッフ（同じメンバーに偏ってしまう）の方々にとっては非常に負担となりますが、「推進員」を生み出し続けること（継続）は大切なことだと思われますが、皆様はどう思われるでしょうか？

今後の「養成講座」について

この二カ年で前期教習を終えられた方の中にも、ご自身の都合等で本山に上山することが出来なかった方も多くおられます。そこで教区教化委員会の門徒研修部門では、「教区」全体としての後期教習奉仕団を実施することが出来ないか「試案」として考えているところです。

私自身『現代の聖典』は時代に合わなくなって来ているのかと考えることも有りましたが、先日、教区で開筵（かいえん）された「秋安居」で、講師の福島光哉氏が、「観経序分」での凡夫・韋提希の姿こそ、宗祖親鸞聖人が大切にされたところであるとご指導をいただき、改めて『現代の聖典』の持つ大きな意味を教えていただきました。そこから、私を含めた育成員・寺族が共通して持つべき必要のある課題（『現代の聖典』が選び取られた必然性）だと思わされました。

高田教区駐在教導　藤原雅夫



後期教習に参加して

第三組應満寺門徒　**笠原　重人**

前期教習では、真宗宗歌はもちろん勤行集の一節も読めないことから声すら出せない状況でした。覚えるよりなれるしか無いと腹をくくって教習に臨んだのが本音でした。それでも回を重ねる毎になんとか音階や調子が皆さんに合わせられるようになり遠慮しながらの勤行となりました。気がついたら七回目の教習終了を迎えていました。

こんな状態では後期教習の参加もおぼつかないのではと自問自答しながらの上山でした。山門をくぐって目に入る御影堂、阿弥陀堂は何時の時代も壮大、威厳が保たれ驚嘆と感動を受けると同時に、先人の残した偉業に敬服するのみです。

後期教習では帰敬式、自らの行動指針とも言える「宣誓文」の作成、親鸞聖人御真影前での宣誓等、真宗門徒としてのみならず人間形成としての生涯学習を体験させていただきました。

最後になりましたが、今期の講座でご指導、御世話になりました各寺院のご住職様に心より感謝申し上げます。

教習から学んだこと

第六組本浄寺門徒　**石黒　邦子**

十二月八日から三日間、京都の東本願寺に上山して養成講座後期教習を受ける機会をいただきました。私は長年、看護に携わり、癌告知など「死」の現場で、精神や心理の問題に関心をよせてまいりました。また、夫との死別の経験もあり、どうしたら心の安らぎをたもてるのか、今回の教習に大変期待して参加させていただきました。教習での課題の一つであった「信心」についてはよくわかりませんが、「浄土」は、死後の問題ではなく、みんなで「それっていいよね。」と共感できる心の浄土なら素敵だなと思えました。また、自分の行為でいただく笑顔に救われている自分に気付き、日々の生活全ていただいているのだと有り難く思えて、これが自分の浄土なのかとも感じました。みんなで一つの目的をもって話し合い、意見を聞くことは、自分の考えを見つめ直すとてもよい機会になりました。そして、知ることの喜び、教習に参加しなければわからないことがたくさんあるということを感じました。すぐにでも次の講座に参加したいです。お礼を申しあげますと共に、また、よろしくお願いいたします。

研修を終えて

第七組極生寺門徒　**安藤　喜悦**

二〇〇九年は私にとって八十年の人生の中で最も印象に残り、これからの生きて行く上での新たな指針を与えて戴いた佳き年になりました。というのは、高田教区第七組の第十次推進員養成講座受講者として四月から六ヵ月間の前期教習を受け、十一月に本山東本願寺へ上山、後期教習を受講、新たに推進員として認証された年だったからです。

私が曲りなりにも仏法と出遇ったのは、今から五十余年も前の昭和三十一年に、極生寺の前住職尾﨑順秀師が主催されていた「在家仏青、百知会」の仲間にさせて戴いた時からです。当時の高田教務所長・春田義正師らの指導を受け、仏青活動に邁進し、上越地域の各所に在家仏青の組織の立ち上げに努力してきました。

しかし今考えますと、その当時の私たちは、仏法そのものの真意すらわからず、ただがむしゃらに動き回っていたのでした。今回推進員の教習によって、私なりに本当の仏法に巡り遇えたと思っています。これを契機にひとりの真宗門徒としてさらなる精進を重ねたいと思っています。

これからがスタートだ
養成講座を終えるにあたって

第十三組光徳寺住職　**篠原　真**

第七次推進員養成講座を二〇〇八年六月にスタートし、十回の講座を重ねて前期教習を終えました。後期教習は二〇〇九年十月三日～六日に実施しました。参加者数は受講者三十一名、スタッフ八名の計三十九名、講師は高岡教区第三組大福寺住職太田浩史先生でした。帰敬式は修復なった御影堂での初めてのものであり、忘れられない受式となりました。

講座終了後のアンケートに、「後期教習は、自分にとって歴史的なことであり、最高の感動を頂きました。」と書かれた受講者がおられます。「妻は、食事の前に読経するので食事が三十分遅れる。」と奥さんの変わり方を喜んで聞かせてくれた方もおられます。また、受講者の「この感動を誰かに伝えたい。」「いつか、同じメンバーで聞法会を開きたい。」「お寺のために何か役立ちたい。」等の思いが伝わってきます。

後期教習の終了が終わりでなく、新たな始まりとなることを、熱く願われています。

参加者のひろば

坊守会報恩講

坊守会報恩講に参加して

第七組本龍寺　竹田　知里

私は昨年五月に結婚し、大阪から新潟に来ました。今までの生活とは全く違う環境に、毎日毎日戸惑っています。坊守という言葉さえ知らなかった私に、「坊守会報恩講」のお知らせが届きました。坊守になりきれてない私には、参加できないものだと考え、不参加でいるつもりでした。

そんなある日、坊守会長の横山さんから、「得度などしてなくても、参加してみて下さい。」とのお言葉をもらい、見学がてら参加しました。

報恩講に行ってみると、想像以上にたくさんの坊守さんが集まっていることに驚きました。そして、お経をたくさんの人と声と心を合わせることは初めてで、とても幻想的で良い経験ができました。第一組光徳寺水嶋先生の法話も、今まであまりにも身近にある「いのち」について、あらためて考えさせられる良い機会を与えてもらいました。

私にとって「坊守会報恩講」は、本当に貴重な体験でした。また、他の坊守さんとお話させて頂き、有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

センター活動報告

一月から二月にかけての大雪で、冬期間スキー研修での利用がある青少年センターにとっては、「これで春まで大丈夫。」と胸をなでおろしたものの、三月に入ってからの雪解けの早さを見ると、やはり地球温暖化と冬の期間の短さを実感させられた。

二十二回目を迎えたセンタースキー学校（大人の部）は、早朝の整備されたゲレンデにシュプールを描くため「サンライズスキー」と銘打って例年より朝食を早めての出発となった。また、「雪に愉しむ池の平」（ファミリーの部）は、天候にめぐまれたとはいえないものの、参加した子ども達は最後まであきらめず、すのこぞりや歩くスキーに挑戦した。

ここに、参加者の声を紹介させていただく。

センタースキー学校に参加して

山形教区善行寺　三森　孝

以前から一度は訪れてみたいと思っていた上越の地にうかがい、今回初めて池の平青少年センターでのスキー学校に参加させていただきました。すっかりスキーから遠ざかっていた私でしたが、高田教区から赴任した橘駐在から話を聞き、どんな所か是非行ってみたいとの思いがつのり、思いきって申し込みました。事前に保倉さんから送っていただいたマップや資料に目をとおすと、居多ヶ浜をはじめ見るべき親鸞聖人ゆかりの場所が多いことに驚き、一ヶ所でも多く訪れたいと欲張ってまいりました。

スキー学校に参加してまず驚いたのは、プロのスキーの先生による本格的な指導が受けられることです。なにしろ少人数なので、「どんな練習がしたいですか?」と先生から言っていただけるほど、自由な雰囲気の中で最新の技術を教えていただきました。二日目の朝には幸いにも雪がたっぷり降り積もり、朝一番で杉の原に移動し、きれいに圧雪整備されたばかりのゲレンデを滑ることができ、言葉にできないほどの気持ちよさでした。雪化粧した木々は、一面花が咲いた様に美しく、スキーの楽しさすばらしさを再認識させていただきました。

夜の懇親会は酒も入り、リラックスした感じで、初めてお会いする方

ばかりでしたが、皆さんが気さくに言葉を交わして下さったので、遠くに感じていた上越との距離がぐっと近づいた様に感じました。スキー学校の皆様、本当に有難うございました。

法務の為、途中で帰らなければならなくなったのは残念ではありましたが、今度は是非、すのこぞり世界大会にも子ども達をつれて参加してみたいなどと本気で思いながら山形へと車を走らせ、慌ただしい日々の暮らしへと帰ってきたのでした。

第22回センタースキー学校大人の部

センターってどんなところ？

岡崎教区善宿寺　**藤谷　優子**

池の平青少年センターは、心の温かくなる場所です。玄関では、たくさんの方が手をかけて作られた木の表札が出迎えてくれます。そして保倉さんを中心としたスタッフの方のお心遣い…。私が感動したのは、お花がいろんなところに、これまた手作りの花器に生けてあること。お食事がお手製で心がこもっていて美味しいこと。朝の目覚めの音楽が、オカリナの生演奏なこと。いうなれば手作りの里。そして寺を守っていこうと思う心にホスピタリティーを教えてくださる場所でした。

三日間の研修に行かせてもらい、池の平の場の持つ力、迎えてくださる方のお心。安心して家族一人ひとり居場所をいただきました。朝夕の勤行で子ども達の声が響いていく感動。目に見えないお念仏のおはたらきってこういう感じなんだ!!　っていうことをお土産にさせてもらったと思っています。

もう一つ、すばらしいお土産をいただきました。それは、「すのこぞり二〇一〇年世界大会inじゃぽん」で二年連続で優勝し、第一位の豪華メダルをもらったことです。大切にかざり、三年連続の優勝を夢見ています。最後になりましたが大変お世話になり有難うございました。来年も宜しくお願いします。

追伸　スキーを教えてくださったお二人の先生の忍耐強い御指導に感謝で一杯です。

2日目 歩くスキー すのこぞり仙人の便りを手に、きつね池をめざす参加者

《訂正》
前号（第一一七号）の文中に於いて誤植がありました。
訂正しお詫び申しあげます。
四段目八行目（誤）張って↓（正）貼って

児童冬の集い

楽しかったスキー

上越市　小六　**藤井　朱瑞**

私は、今年初めてスキーに行きました。

友達とスキーに行ったのは、初めてだったけど、とても楽しかったです。

教えてくれた先生達も、おもしろくてよかったです。でも、みんなのスピードがすごく早くて、びっくりしました。なので、スピードを出しすぎて、たくさん転びました。だけど、そのおかげで、けっこう上達できたので、すごくよかったです。

夜、みんなで遊んだことも、とても楽しかったです。みんなでハンカチ落しゲームをしたり、いろいろして、すごく楽しかったです。

また、来年も行きたいと思いました。

研修会等

同朋唱和講習会に参加して

第六組本浄寺　吉田　晴正

大雪警報が出され、交通事情も思わしくない中での声明講習会でありましたが、本山本廟部堂衆の松村大栄師から直接ご教導頂ける貴重な機会と捉え参加させて頂きました。

すでに「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌　同朋唱和勤行集」のDVDや指導教本等が配布され、教本には注意事項等も記されていましたが、実際どう発声に気を付ければよいのか分からなかった私にとりまして、具体的に学ぶよい機会となりました。

松村師は、御遠忌法要で厳修される次第とこれまでの伝統的な報恩講次第との違いを踏まえ、逮夜勤行、晨朝勤行、日中勤行における声明のポイントを丁寧に指導されました。調声を入れる際の磬の音量と間拍子の取り方や、真四句目下で「ー」のある箇所の前後の声明の仕方など配慮すべき点を分かりやすく説明されました。今回学びましたことを上山予定の御門徒の方々に折に触れて伝えていきたいと思っています。

二日間に渡ってご指導下さいました講師並びに、このような企画を設けて頂きました寺族研修部門の皆様に厚く御礼申し上げます。

教学研修会をうけて

第六組西光寺　豊島　信

三木彰円先生は講義の中で、「本願とは何かではなくて、人間とは大悲される存在である」といわれた。大悲されるのは、煩悩具足、虚妄顛倒の我らにほかならない。そのことと本願とは切り離されるべきではなく、その我が身の愚かなる真実の自己への目覚めのもとをたどっていったならば、そこには法蔵菩薩の志、五劫もの長きにわたる思惟の末の誓願に到るものであるのではないか。それは三木先生が「果（煩悩具足の私という事実）から因（如来の本願）をたどる」といわれたことから、私が今まで漫然と領解してきたことのもとを正すきっかけとなった。「本願とはいかなるものか」「如来とはいかなるものか」というような文字にばかり気をとられ、今ある自分とは一体何かということや、人間の苦しみの根源なるものを問うというような、「自己」ということを抜きにして聖教を読んでいてもなんら意味のないことであるということを教えられたように思う。三木先生はさらに、「人間（自分）がどこまで批判を徹底できるか」「他を批判する自分であるのか」という問いかけをされ、心得たとおもう心の危うさを常に問いただすことばとして私自身受けとめていきたい。

大雪の新井別院

新井別院の雪の状況を、新井別院の職員（会計）朝日正顕さんにお聞きしました。

一番心配だったのが、本堂と庫裏の渡り廊下の屋根が傷むことでした。新井別院では一番低いところになるので、こつら（軒先）の雪がつながっていましたし、もう少し降っていれば被害が出るところでした。

本堂は屋根のペンキを昨年塗ったばかりなので雪の滑りがよく、多少屋根の上の雪と落ちた雪がつながりましたが、大事にはいたりませんでした。

建物の周囲の除雪は手間取りました。屋根から落ちてくる雪と積もった雪がつながっていて、落ちてくる雪に注意しながら、見張りの人と声を掛け合いながらの除雪でした。除雪機も二回ほど、途中で立ち往生したり、転倒したりして業者にお世話になりました。

例年、境内にあるときわ保育園の遊具は雪が降る前に片づけるのですが、今年は間に合わず、年明けの雪に埋もれてしまいました。少し雪の落ち着いた一月末には片づけて本堂の中に収納されたようです。園児の皆さんは雪の中でも元気よく遊ぶ姿を見せてくれて、毎日の除雪の中でも救われた思いでした。新井別院での仕事は六年になりますが、こんな雪を経験したのは初めてでした。

愚僧のつぶやき

〈お内仏の荘厳編②〉

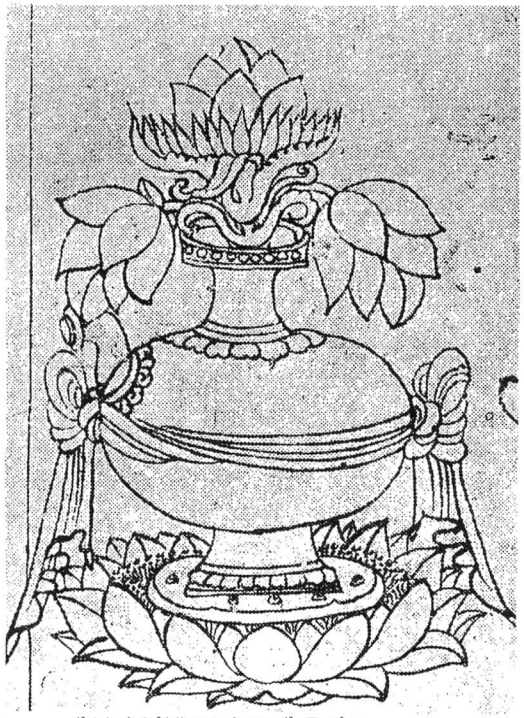
今回、まず見て頂きたいのは、須彌壇上に置かれた小さな机、上卓です。（小型の仏壇では略して金香炉を置く場合もある様です。）実はこの上卓は護摩壇の名残りといわれています。でも一体なぜ真宗のお内仏の荘厳の中に、そうした真宗の教えに合わないものがあり、その一部が今日まで残っているのでしょう。そこには、本願寺の歴史がある訳です。

本願寺の原点は、親鸞聖人の小さな一基の墓でした。それが後に六角廟堂となり、更にそれを墓ではなく聞法の道場としての寺院となる事を望みました。しかし当時、寺院を名乗る為には、国の安泰を祈る必要があり、後に本願寺が勅願寺となり、護国の為の重要な寺院となったことにより、祈祷の為の護摩壇を置く必要に迫られたことが想像されます。

その後、蓮如上人が親鸞聖人の教えに合った形を求めて荘厳改革を断行します。そして、その最初に手掛けたのが護摩壇の撤去だったといいます。ただ、蓮如上人の凄い所は、教えに合わないものを単に取り除くのではなく、それを真宗独自の荘厳に変えていくのです。具体的にいえば、護摩壇の手前部分を上卓とし、その荘厳の中から仏前荘厳として古くからあった華瓶（けびょう）、火舎香炉、仏器だけを残し、そこに香盒を加えて上卓の荘厳とし、それを仏の座である須弥壇の上へもっていくんです。このことにより、私から仏様へ回向するものだった護摩壇は無くなり、全てが仏様からの他力回向であるという真宗の教えを上卓によって表わした訳です。だから私は上卓を見る度に、本願寺を名乗る為に苦悩された先人の事や、蓮如上人のご苦労を思い、手が合わされることです。

次に、華瓶を見てください。樒（しきみ）を挿している瓶です。本来、迦羅舎（からしゃ）と呼ばれる香水や薬などを入れた宝瓶（ほうびょう）であり、真宗に於いても八功徳水という清浄な水を荘厳する為のものです。では何故、樒を挿すのかというと、古代インドではその蓋（ふた）として、蓮の花を挿していたんです。でも当時の日本には蓮の花がなく、その代用として葉の並びの形が蓮の花に似ている樒が選ばれた様です。又、樒には水を腐りにくくする効果があるともいいます。でもそのことは、植物の専門家でもあまり知られていない様です。だからきっとそれは、先達の方々の心を込めた毎日のお給仕により知り得たことではなかったかと思い、頭の下がることであります。

（ペンネーム　維摩　教信）



大悲胎蔵三昧耶曼荼羅図（ダイヒタイゾウサンマヤマンダラズ）の迦羅舎

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌（進捗状況）

二〇一一年三月から五月にかけ厳修される宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要に向け、高田教区における御遠忌推進事業の進捗状況についてお知らせします。

一　教区団体参拝について

高田教区においては団参総数二千七百五十の席が確保されており、現在各組においてそれぞれ計画及び募集などの取り組みが始まっています。各組ともバスでまいります。

また、京都の団体参拝受入センターにおいて全国の申込状況が確認され、本年十月に参拝席の抽選が本山で行われます。

二　高田教区の日について

各教区が宗祖御遠忌を機縁として、御遠忌基本理念「宗祖としての親鸞聖人に遇う」を、「各教区の地域性・歴史性や独自性を十分発揮した内容」をもって具体的に表現し、様々な方法で全国に発信することを趣旨に、全国三十教区が取り組んでいます。

高田教区は、宗祖親鸞聖人が流罪に処せられた地であり、また明治の両堂再建時に尾神獄（おかみだけ）において殉難があった教区でもあります。私たちは今回の御遠忌を、宗祖の御流罪と尾

神嶽殉難とをもって讃仰いたしたく、次記のとおりで実施します。

① 記念講演

日時　二〇一一年四月十五日午後一時三十分から三時三十分まで

会場　真宗本廟　視聴覚ホール

講師　井上　円氏（第十三組浄泉寺住職・元大谷大学専任講師）

テーマ「宗祖の御流罪に学ぶ」

② 展示

期間　二〇一一年三月十三日から五月二十八日まで

場所　真宗本廟内の指定された場所（詳細は未定）

内容　パネル展示、尾神嶽殉難のジオラマなど

※展示スペースの関係により詳細は未定。

③ 団体参拝

四月十四日から十六日まで二泊三日の日程で高田別院が主催し、バスで団体参拝を実施します。募集については、高田別院より後日ご案内がありますので、この機会にぜひご参加ください。

完納御礼

二〇〇九年度宗派経常費（相続講金・同朋会員志）を御進納いただき誠にありがとうございます。

ここに、年末完納いただきました御寺院名を御披露し、御礼にかえさせていただきます。

第2組
恩敬寺

第3組
明了寺　禮信寺　浄念寺

第4組
西勝寺　慈圓寺　養性寺　當正寺
正行寺　隨念寺　持専寺　浄善寺
敬音寺　願浄寺

第5組
西榮寺　林覺寺　覺真寺　安證寺

第6組
常敬寺　長圓寺　最賢寺　願通寺

第7組
妙行寺　明福寺　極生寺　聞稱寺（下町）
速念寺　浄善寺（飛田）

第8組
圓性寺　明岸寺　勝名寺　覺願寺
本覺坊　願立寺　源長寺

第11組
圓重寺　寶惠寺　友岸寺　添景寺
法善寺　専敬寺

第12組
専德寺　法西寺　善德寺　光善寺
正立寺　光圓寺　西忍寺　敬泉寺
德生寺　敬德寺

第13組
榮恩寺　福浄寺　光德寺　了蓮寺
正行寺（大潟区）　本善寺　啓明寺　願念寺

（二〇〇九年十月十四日～二〇一〇年一月二十日）

以上五十九ヵ寺

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌御修復懇志金御依頼額を完納いただき誠にありがとうございました。

ここに、完納いただきました御寺院名を御披露し、御礼にかえさせていただきます。

第4組
願浄寺

第6組
常榮寺　西光寺　最賢寺

（二〇〇九年十一月一日～二〇一〇年二月二十八日）

以上　四ヵ寺

●おくやみ申し上げます

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

第4組　隨念寺前坊守　日野　梅子
第5組　寶善寺前坊守　横山　とし
第6組　浄光寺住職　小山　善住
第7組　浄善寺前住職　関　厚隆
第13組　養法寺前坊守　松岡ヒサミ

●おめでとうございます

◎住職就任

第6組　長樂寺　中島　裕文

◆編集後記◆

今年の冬は気象庁の予報がはずれて大豪雪でした。過去の豪雪を体験している私にすれば平年並みに思えたのですが、あるご門徒さんに「嫁に来て二十三年経つがこんな雪は初めて。」と言われて、平年並みと思っている自分の感覚が二十三年以上も前の感覚なんだと思い知らされました。

ところで、本山での宗祖七百五十回御遠忌法要に向けての取り組みが、私たちにもだんだん見えてまいりました。

来年の御遠忌の期間中は教務所の職員が本山勤務となり、教務所の通常業務が難しくなるとのこと。職員の本山勤務は御遠忌の期間中だけとはいえ、その前後の教区活動に相当に大きな影響が出ることは避けられそうにもありません。なんだか御遠忌という言葉に振り回されているような気さえします。

五十年に一度の御遠忌というものは、真宗大谷派として続けてきた教化活動の延長上なのか、それとも御遠忌のために教化活動を続けてきたのか、その答えを見つけるための御遠忌にしたいものです。

（内山）

『響流』編集委員会からの依頼原稿、並びに、お寄せいただいた原稿については、漢字の使い方・言いまわし等、できる限り執筆者の表現を尊重して掲載させていただいております。